

道徳学習指導案

日 時 平成 年 月 日 ()

場 所 年 組 教室

学 級 年 組 名

指導者 教諭

1. 主題名 正義、公正・公平、差別・偏見 4 - (3)
2. 資料名 「卒業文集最後の二行」 『心に残るとっておきの話 第二集』 1994 潮文社
3. 主題設定の理由

○ねらいとする価値について

人は社会の中で、多くの人や仲間との係わりの中で生きている。望ましい人間関係を築いていくためにはお互いの立場や気持ちを考え、信頼し、助け合おうとすることが大切である。

この時期の生徒は、自我が確立してくるに従って、真の友情を求めるようになる。困っている時に相談にのってくれたり、悩んでいる時に励ましてくれたりする友だちは心の支えになる。また、人は逆境に立たされた時こそ、友として相手を信頼し、理解し合える友情に支えられ、勇気をもって生きていくことが出来る。

多感な時期を迎える生徒達に、本当の友情について考えさせ、よりよい人間関係を築いて欲しい。

○生徒の実態と価値意識について

本学級の生徒は、与えられた課題等には取り組むが、自主的な学習意欲に課題がある。また、学習に集中して取り組めなかったり、家庭学習が不十分な生徒も見受けられる。

学校や家庭での身近な生活の中で、自己目標や自己実現を目指し、意欲を持って課題に取り組もうとする生徒が少ない。また、課題に対して意義を見出しきれず、何となく毎日を過ごしている生徒も見受けられる。相手を思いやり、自ら考え行動する等を通し、本当の友情、友だちとは何なのかを考え、これから出会うであろう様々な困難にも、友だちの存在が大きな支えになることに気づき、仲間のことを思いやることのできる生徒を育てたい。

○資料について

資料は、小学生だった著者が、同級生のT子さんをひどくいじめたことを振り返りながら、自分を責めるというものである。ところどころに出てくる著者の自己呵責の言葉が、その後悔の深さを物語っている。また、そのいじめがいかにも不条理で悪質なものが、口にする罵詈雑言の内容から容易に感じ取れる。さらに、当時の著者の考え方から、「いじめる側の論理」が見えてくる。この資料を通して生徒たちは、いじめの残酷さ、非情さを強く感じ取ると同時に、いじめをする人間の心の弱さに気づくであろう。そして、いじめられたT子の苦しみに対して強く共感を覚えるはずである。

○指導について

指導にあたっては、自己中心的な考え方から脱却して、視野を広くもち、自分の立場から社会をよりよくしていこうとする気持ちを大切にする。「見て見ぬふりをする」とか、「避けて通る」という消極的な立場ではなく、不正を憎み、不正な言動を断固として否定する、たくましい人間が育ってくるように指導する事が大切である。世の中から、あらゆる差別や偏見をなくすように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会実現に努めるよう指導する必要がある。自他の不正や不公平を許さない姿勢と、力を合わせて積極的に差別や偏見をなくす環境が重要である。

今回の指導では、終末に社会的道義心が希薄化しつつある現代社会において、「人は社会の中で何にあるべきか」を説き、簡素に表現された孔子の『論語』を用いることで、これまでの自分を振り返る機会とした。『論語』は読み手を選ばず、生徒はそれほど難しいものとは捉えないと考える。

また、『論語』は「道徳」の内容とかなりの部分で重なり合うところが多い。ここでは『論語』を教科書的に捉えるのではなく、よりよい生活を送るための一助として取り入れたい。

4. 本時のねらい

- ・ いじめの加害者が将来にわたって抱える苦悩を知り、正義の強さと大切さにふれ、差別や偏見のない社会を実現しようとする態度を育てる。

5. 展開

学 習 活 動	○主な発問（予想される生徒の反応）	指導上の留意点
① 身のまわりにある差別や、偏見について話し合う。	○現在、身のまわりにある差別や偏見（日本だけでなく世界各国も含め）には、どのようなものがあるだろう。 ・ 人種差別 ・ 仲間はずれ ・ 悪口「性格、体型、家庭環境など」	・ 差別と偏見の区別がつかない生徒のために意味をおさしておく。 ・ 周りの友だちと話し合いをさせることにより、たくさん例を出せる。
② 資料「卒業文集最後の二行」の範読を聞いて話し合う。	○私が仲間と一緒にT子さんを口汚くのりし続けたのは、どうしてだろうか。 ・ 服装がみすぼらしく不潔だったから。	・ T子さんの外見に対する不快感がいじめの根本にあり、人間性とは無関係であることをおさえる。
③ 差別・偏見・いじめについて話し合う。	○目の前が真っ白になり、同時に真っ暗になった時の私は、どんな気持ちだったのだろうか。 ・ T子さんが、最高得点をとっていた。（真っ白） ・ カンニングという卑怯なことをした。（真っ黒） ・ 敗北と後悔の気持ちが同時に起こった。 ○30年あまり過ぎた今でも後悔している私は、どのような気持ちで生きてきたのだろうか。 ・ T子さんの苦しみをわかろうとしなかった。 ・ 素直にT子さんに謝ればよかった。 ・ 自分には、考えたことを行動に移す勇気がなかった。 ・ T子さんにしたことは、一生取り返しがつかない。 ○最後の二行に書かれたT子さんの言葉には、どんな気持ちがこめられているのだろうか。 ・ 優しくしてくれる本当の友だちを求めている。 ・ 自分をかばってくれる友だちがいなかった寂しさ。 ・ みじめな思いをした悔しさ。	・ 負けた悔しさや良心の呵責にさいなまれる気持ちに気づかせる。 ・ 人の心を傷つけると、その後悔の念はずっと続き、自分自身も心に傷を負う。 ・ 良心の声に忠実に生きることができないと、その後悔がずっと続く。 ・ いじめられる立場にある人の痛みや悔しさに共感させる。 ・ 友だちの意味やかかわり方について考えさせる。
④ 教師の説話 ・ 人々の生き方についての教えを紹介する。 「論語」から	○「孔子」が人の生き方をしめしました。その教えを表した書物『論語』に、このような教えがあります。 ・ 「義を見て為ざるは 勇なきなり」 ・ 「己の欲せざる所は 人に施すこと勿れ」 ・ 「仁に志せば 悪むこと無きなり」 ○本日の感想をワークシートに記入する。	・ 紹介したそれぞれの論語意味について説明を行う。 ・ 他にもさまざまな教えがあることを知らせ、意欲的に取り組むよう勧める。

6. 評価 ・ 周囲の目を意識し、多数派の意見や考えに左右され、自己中心的な考えや行動をとらず、正義感にあふれ、差別や偏見を許さない心情を育てることができたか。

卒業文集最後の二行

一戸冬彦 著

『思い出となれば、みななつかしく美しい。』と俗にいわれるが、それは過去を美化しているか、時間の経過とともに風化してくれるのをいいことに、つらい体験や苦しい思い出を忘れようと「努力しているにすぎまい、と私は勝手に解釈している。

傲岸で不遜きわまりない性格の私は、「たまには反省しても、決して後悔はすべきではない。」と自分に言い聞かせ、それを信条としている。

だが、こんな私でもこの場を借りて懺悔したい、いや、せずにはいられないできごとがある。深い深い後悔。取り返しのつかない心の傷だ。

時は、青森県五所川原市の小学校時代にさかのぼる。

同級生にT子さんという女の子がいた。彼女は早くしてお母さんを亡くし、二人の弟さんのめんどうもみなければならなかった。お父さんは魚の行商である。

つまり、Tさんは母親代わり妻代わりとっていい。しかも、お父さんの仕事があまりかんばしくないようで、経済的にも恵まれず、そのころの時代にしても彼女の服装はみすばらしいというより、正直言って汚かった

今にして思えば、経済面からもそうであろうが、母親代わり妻代わりという生活環境から、自分の身のまわりをかまっているどころではなかったのであろう。

そのTさんが、六年生の時私の隣の席になった。加えて、運の悪いことに彼女よりちょっとばかり成績が良く（もっともTさんも上位の成績だった）、金銭的にも幾分恵まれた学童（男女）が彼女の席を取り囲むかたちになった。

「きたねえから、もっと離れろ。」

「シラミ移すなよ（当時でもシラミはいなかったのだが）。」

この私の言葉に悪童たちは、さらにはやしたてた。

「魚の生ぐさいにおいがしてくさいがら、だれもT子に近づくなじゃ。」

「T子、同じ服を何週間着てるんだバ？」

「毎日ふろさ入って頭を洗って、シラミを取ってこいよ。」

こうしたいやがらせにも、Tさんは泣きもせずじっと耐えた。ほおを紅潮させながらも歯を食いしばって、涙を見せもしなかった。泣いたり涙を見せたりすると、我々にもっとバカにされ、いじめられると思ったのであろう。

しかも、Tさんの立派なところは、担任に一度も告げ口しないことだ。担任のM先生は校内でも屈指の怖い先生なのである。M先生に告げれば我々はこっぴどくしかられ、自分もいっそうみじめになると考えたのではないか。

ひきょうな我々は、Tさんが告げ口しないのを知って、さらに輪をかけて口汚くののしり続けた。

そんなある日、クラスで漢字の小テストが行われた。問題用紙に、どうしても書けない漢字が、私に二個あった。困った私が隣のTさんの回答用紙をチラリと盗み見ると、彼女はちゃんと書いていた。しかも、正答である。それとばかりに、私はカンニングした。

後日、答案返却があり、その際にM先生が私をほめてくれた。

「イチノへ、よくがんばったな。満点はおまえ一人だけだぞ。」

私は後ろめたさを少し感じただけで満足だった。なにしろ、満点は私だけなのだから。

だが、そのあとに渡されたTさんの答案用紙を見て、私は愕然を通り越して眼の前が真っ白になり、同時に真っ黒になった。なんと、Tさんは一個だけのまちがいで、九十八点なのだ。私がカンニングをしなければ、Tさんは満点ではないが、最高得点者ということになる。

私は弱虫であった。勇気がなかった。卑劣な人間だった。T子さんは私がカンニングしたことを知らないようである。それどころか、T子さんは皮肉などカケラもなく、

「さすがイチノへさんね。おめでとう。」

微笑みをもって心から言ってくれたのだ。それに対して私は、

「問題が易しかったからな。」

と、臆するところもなく当然のように答えた。全くおろかで、鼻もちならない私、M先生に正直に告白し、T子さんに謝るべきであった。実に情けない。三十年を経た今でも慚愧に堪えない。

さらに、そんなT子さんに、もっとひどい追い打ちが待っていた。授業のあと、T子さんの答案用紙を例の悪童どもが見て、

「イチノへの答えを見で書い込んだらう。」

「おめいが九十八点も取れるわけがねえよ。」

「カンニングしてまで、いい点数を取りたかったのか？」

と、口をきわめて彼女に中傷の矢を浴びせた。さすがの私も、この時はこの中傷に加われなかった。

ところが、連中があまりに騒ぎたて、T子さんを責めているのを聞いているうちに、私の心の中の後ろめたさが消え、逆に連中のしり馬にのる発言をしてしまった。

「やっぱり、おめえは私の答えを見だんだらう。見だに決まっている。ずるいと思わねえのか。このシラミ女め。」

するとT子さんは泣き声で、

「私はイチノへさんの答えは見でいません。着ているものや髪はきたねえかもしれないけど、心はきたなぐねえです。」

と、机に顔を伏せたあと、

「私をどこまでいじめれば、みなさんは気がすむの！」

叫びながら石炭小屋のある方へ走って行った。T子さんの初めて泣いたり叫んだり、その場から逃げだしたりと言動に、悪童どもは言葉を失った。私は彼女のあとを追いかけて、土下座して謝りたい衝動にかられたが、その度胸も勇気も瞬時にして吹っ飛び、それどころか連中を前に、

「ほんとのごとを言われたんで、あれほど怒ったんだ。私の答えを見でめぐせえ（恥ずかし）と思わねえのかな。」

と、胸を反らせた。

石炭小屋から戻っていたT子さんは、涙こそふき収められていたが、目をうさぎのように充血させ、まぶたを厚くはれさせていた。

……やがて、卒業式を迎えることになった。

だが、式の日配られた『卒業文集』をその日の夜に家で読み、私はまくらを濡れに濡らしてしまった。T子さんの作文の、特に最後の二行が私の涙腺をはてもなく緩めたのだ。

『……わたしが、今いちばん欲しいものは、母でもなく、
本当のお友達です。そして、きれいなお洋服です。』